

2018年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

さし交はず枝の先まで春隣  
洗濯も掃除もしたくなる三日  
海を恋ふ音たて乾きゆく若布  
金縷梅のいぢけ加減をひからせる  
剪定を尽くしすっからかんの枝

藤沢 藤田 富子

黄落の池にきらめき散らしけり  
いにしへの名刹の跡落葉降る  
凧わたる海一望の冬日和  
眼科医の俳句談義や十二月  
短日の刻の過ぎゆく探しもの

八王子 石井 蓉子

行商の声の届きしも柚湯かな  
明日冬至店の角占めゆず売り場  
通院を終へそれよりの年用意  
作業所につけば声来る霜の朝  
クリスマスサンタ待ちたる早寝かな

町田 小森 まさひこ

水仙の咲きて日本海荒ぶ  
雪壁を登校路とせる小学生  
大雪を靴に語らせ集ひたる  
薄氷を進みゆく日の刻々と  
雪富士のダイヤモンドの夕日かな

2018年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

白き根を青く匂はせ芹を積む  
椽の芽の光り大きくほぐれ来し  
猫の子の興味深々なる眼  
七色に匂ひ十色に木の芽吹く  
ためらうてとまどうて初桜かな

藤沢 藤田 富子

みどり児のおすわり出来て春そこに  
恙なきことのみ願ひ春を待つ  
凍解の道踏みしめて歩をはこぶ  
尻もちの人を笑へぬ雪の街  
こつこつと働きくれし針納む

八王子 石井 蓉子

懸命に生きたる吾に梅開く  
公園の子供は無邪気春夕焼  
日脚伸ぶ工賃得たる帰り道  
春の香を匂ひ立たせる光かな  
夕暮れや春待つ神社静かなり

町田 小森 まさひこ

山肌を隠し立山蚩烏賊  
大海の香も煙らせて目刺焼く  
春雨や乳房まさぐる像の立つ  
白き山に空青くして花辛夷  
大ばさみ操り羊毛を刈られ

2018年5～6月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
雲の道風の道なる朴の花  
豆の花咲かせラジオを連れとして  
声の色変へてささめく百千鳥  
落日の影くれなゐに雪解富士  
茅花流しに遠き世を引き寄する

藤沢 藤田 富子  
笊落つ水の奏でる春のうた  
春寒の池底に鯉のみじろがず  
友ひとり去りふたり病み春憂ふ  
咲き初むる花に無慈悲な雨しとど  
春の浜芥のこして潮の引く

八王子 石井 蓉子  
まんじゅう屋そこが仕事場藤の花  
春の日や洗濯物は日の匂ひ  
春風やどこもかしこも笑ってる  
春は良しつくしたんぽぽすみれ草  
帰り道陽射しは強し矢車草

町田 小森 まさひこ  
荒れ狂うことも下町三社祭  
三社祭雷門を埋め尽くす  
激しきは女神輿に三社祭  
東京の田植の舞や三社祭  
浅草に季節呼び込む祭りかな

小林一茶  
雀の子そこのけそこのけお馬が通る  
やせ蛙まけるな一茶これにあり  
鳴く猫に赤ん目をして手まりかな  
われと来て遊べや親のない雀  
夕月や鍋の中にて鳴く田螺

2018年7～8月掲載分

習志野 大慈彌 爽子  
噴水の風に挑んでゐる乱れ  
汗を尽くして残りたる悔いすこし  
朝顔の色風に破れ日にやつれ  
泣けなくてつまくれみに手をのばす  
六道と背中合はせにゐる炎暑

藤沢 藤田 富子  
雛罌粟(ひなげし)の花びら風に逆らはず  
花水木空を明く占めてをり  
薔薇園のばらに埋もれて香に酔ひぬ  
鎖樋光りて露の雫かな  
揚花火見ゆる角度に橋渡る

八王子 石井 蓉子  
向日葵の咲いてる下でじゃあまたね  
合歡の花目印にして待ち合わせ  
夏至の夜の夜更かし決めてみたものの  
大空の一点見てる桜桃忌  
梅雨寒し作業所の道やや遠く

町田 小森 まさひこ  
渴き切る大地の色や松葉菊  
河原へとせり出す床や夏料理  
越平野埋めつくすせし青田かな  
俳聖の登りし寺や雲の峰  
気取らずに咲いて水引の花

夏目漱石  
泳ぎ上り河童驚く暑かな  
雷の図にのりすぎて落にけり  
蝙蝠や賊の酒呑む古館  
仏壇に尻を向けたる団扇かな  
能もなき教師とならんあら涼し

2018年9～10月掲載分

2018年11～12月掲載分